

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19530511

研究課題名（和文）岡山孤児院と大阪汎愛扶植会の 慈恵的 保護と 社会的 援助 移民事業との関連で

研究課題名（英文）Orphans and the Creation of Settlements: A Comparative Study of the Okayama Orphanage of Ishii Juji and the Osaka Home of Orphans of Kashima Toshiro

研究代表者

小野 修三（ONO SHUZO）

慶應義塾大学・商学部・教授

研究者番号：90103902

研究成果の概要：

石井十次の岡山孤児院は明治 20 年に、加島敏郎の大阪汎愛扶植会は明治 29 年にそれぞれ設立され、一時合併話もあったが、競合する児童保護団体だった。この両者の運命を決定的に分けたのは明治 43 年韓国併合と同時に、加島が朝鮮扶植農園という移民事業に挺身した点である。本研究は事務所日誌の翻刻により、また朝鮮総督府文書の調査により、両者間の比較を行ない、殖民思想の違いの他、セツルメントに着手するなど社会事業としての共通性も明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
19 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
20 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会行政史

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：児童福祉、移民事業、石井十次、岡山孤児院、加島敏郎、大阪汎愛扶植会、朝鮮扶植農園

1. 研究開始当初の背景

（1）石井十次による移民事業だった茶臼原孤児院に関する第一次資料たる事務所日誌が石井記念友愛社・石井十次資料館（宮崎県児湯郡）に所蔵されていることは判明していたが、未だ翻刻はされてはいなかった。

（2）加島敏郎による移民事業だった朝鮮扶植農園に関する行政側の資料たる朝鮮総督府文書の所在は不明であった。

（3）大阪汎愛扶植会の第一次資料たる大阪扶植新報は、『大阪市史紀要』第 16 号（昭和 43 年 1 月）から連載された平田隆夫論文「明

治大阪慈恵事業史資料」に引用されていたが、その原本の所在は不明であった。

(4) 石井十次に関する伝記的研究としては、近年菊池義昭・東洋大学教授が石井記念友愛社・石井十次資料館所蔵資料を駆使して精緻な研究を発表しているが、加島敏郎に関しては、相田良雄編『社会事業界の先覚を語る(加島翁古稀記念誌)』(昭和13年)が情報源のほとんどすべてという状況であった。

以上のように第一次資料へのアクセスの道が険しい状況のなかで、岡山孤児院の場合には、これまで石井自身の日記たる『石井十次日誌』、岡山本部の編集になる『岡山孤児院新報』が第一次資料として扱われていたが、それに加えて地方支部に当たる大阪事務所、東京事務所、茶臼原孤児院に勤務する人たちの声を聞くことが出来る事務所日誌の翻刻をさらに進め、一方大阪汎愛扶植会の場合には、韓国への出張調査に期待を掛けることとした。

2. 研究の目的

石井の岡山孤児院、加島の大阪汎愛扶植会における移民事業に至る児童保護の過程を第一次資料の発掘、調査によって比較分析し、日本近代史上の出来事として福祉の営みを理解することを目的としている。

3. 研究の方法

前記「1. 研究開始当初の背景」の各項目に対応して行なった作業を列記する。

(1) 石井記念友愛社・石井十次資料館所蔵の整理番号 A-2-93「茶臼原孤児院日誌」(明治41年11月から翌42年12月まで)を翻刻し、公的利用が可能になるように紀要に掲載した。同日誌の筆記者は石井十次自身である箇所が過半を占め、伝記的資料としても貴重であることが判明した。また2008年2月には宮崎市所在の宮崎県文書センターに出張調査を行ない、文書番号100700「大正12年宮崎県作成・有位帯勲者」の綴りのなかに日誌の内容(内務省慈恵救済事業助成金交付)を裏付ける行政書類を見出した。

(2) 1982年韓国政府記録保存所が日本語表記にて出版した『政府記録保存文書索引目録』を埼玉県川口市所在のNPO法人文化センター・アリランが所蔵していることが判明したので、同所に出張し、同目録の「第1輯第4巻:日政編」を複写することが出来た。そしてこの複写物を携えて2008年8月韓国ソウル・アーカイブズ・インフォメーション・センターに出張調査を行ない、データベース化された朝鮮扶植農園関係書類の閲

覧・複写を行なった。また2009年2月に釜山市民図書館に出張調査に赴いた。本研究協力者の一人安東邦昭氏の友人の鄭世英氏が同図書館員として『朝鮮関連解放前日書篇』との蔵書目録を編集しておられたので、同目録中の朝鮮扶植農園関係書類の原本および副本を鄭世英氏の案内にて閲覧・複写することが出来た。

(3) 『大阪扶植新報』に関しては、その原本を福島県歴史資料館が所蔵していることが判明し、2007年夏同所に出張調査に出掛け、持参のデジタルカメラで撮影することが許可されたが、所蔵されていたのは明治39年3月1日発行の第69号だけであった。

(4) 加島敏郎の遺族が本研究協力者の一人長沼友兄氏の仲介でその遺品を日本社会事業大学附属図書館に寄贈されたので、加島自筆の履歴書、加島の移民事業開始当初の様子を伝える新聞記事の、加島の手になるスクラップブック等を通じ、朝鮮扶植農園についてさらに知ることが出来るようになった。

4. 研究成果

前記「3. 研究の方法」の各項目に対応して研究成果を列記する。

(1) 及び(4) 岡山孤児院の関係では、本研究者によって今回翻刻された茶臼原孤児院日誌に加え、これまで翻刻をして来た大阪事務所日誌(明治40年1月から翌41年3月まで、明治42年5月から明治44年2月まで、及び大正3年8月から大正5年5月まで)と東京事務所日誌(明治40年1月から同年12月まで)等に依拠し、また他方大阪汎愛扶植会の関係では加島の自筆履歴書、スクラップブック等に依拠して、比較分析を行なった。

その結果、両団体は明治40年5月の段階で合併直前まで話が進んでいたこと、またどちらの団体も朝鮮への移民事業を模索していたことがわかった。そして岡山孤児院の場合は石井十次の存命中に国内殖民を宮崎・茶臼原に行なったが、柿原政一郎の証言によれば、院長が大正2年石井十次の没後大原孫三郎に交替した後、「朝鮮開拓は資本投資の領域で、労力投入の場所としては不適當」との判断によって朝鮮への国外殖民は断念するに至った。これに対して、大阪汎愛扶植会は国内殖民は行なわず、明治43年東洋拓殖株式会社から農地を取得して、出身者の就職先確保の道を慶尚北道大邱郊外東村での農業開拓たる朝鮮扶植農園に求めたが、どちらの団体もセツルメントに携わるという共通面が確認された。すなわち、明治42年6月の岡山孤児院大阪事務所日誌を見ると、職業紹介所、保育所、夜学校の運営に乗り出していることがわかるが、これが今日大阪市浪速区日本橋東に所在し、病院や保育所を運営する

石井記念愛染園にまで繋がることとなる。一方加島の自筆略年譜の大正9年の箇所には「朝鮮半島から大阪に渡った労働者のための合宿所を汎愛扶植会内に設け、また職業紹介所を市内に設置した」とある。これは後に内鮮協和会へと繋がる動きであるが、同会は治安対策としての大阪府協和会とは意図を異にするものであった。朝鮮扶植農園は大正3年に法人化され、昭和10年には同農園から加島は退職をして離れ、新農園長には徐丙朝が就任し、地元の孤児収容を中心的事業とする団体に变化していたが、昭和20年8月解散することになった。なお現在同敷地内では扶植農園の事業を受け継ぐ形で、SOS子供村とのカトリック団体による児童福祉施設が運営されている。

研究協力者の安東邦昭氏、長沼友兄氏は更なる独自の文献調査により石井、加島の移民事業をそれぞれ詳細に調査分析している。安東氏は朝鮮半島における岡山孤児院の活動に関して1907年京城で発行されていた地元紙の皇城新聞、大韓毎日申報などを、また長沼氏は朝鮮扶植農園に関して東京都公文書館所蔵「院児渡韓主義二付キ通牒」との朝鮮総督府警務総長明石元二郎発内務省警保局長有松英義宛文書(明治44年4月1日付)などをそれぞれ利用し、分析を行なっている。(2)ソウル・アーカイブズ・インフォメーション・センターにてこの度閲覧・複写した朝鮮総督府文書では整理番号CJA0004825「私設社会事業団体ノ国庫補助申請書二関スル件」との朝鮮総督府学務局長発京畿慶北知事宛文書(昭和11年10月3日付)が最も重要なものの一つであった。同文書のなかには当時の朝鮮扶植農園長徐丙朝からの朝鮮総督府宇垣一成宛の国庫補助願が束ねられていて、同農園の経営状態が詳しく記されている。また釜山市立市民図書館所蔵の日本語文献では、整理番号JB099.11・3『朝鮮功労者銘鑑』上下(京城、昭和10年、375ページ)等に徐丙朝氏の記事を見ることが出来る他に、整理番号JB338.1911『朝鮮社会事業』(第18巻-第19巻、昭和15年-昭和16年)を見ることが出来た。そのなかでは大林宗嗣「社会強化学業の再検討」(第18巻第9号)と三浦義雄「時局下の労務調整と朝鮮労務協会の設立」(第19巻第10号)の二論文が特に示唆に富むものであった。また、朝鮮総督府の文官として勤務していた穂積真六郎らが帰国後設立した財団法人友邦協会は、「過去の事実を冷静綿密に掘り下げて研究してこそ、時代の推移、民族意識の根底に存在する微妙な心理(日韓共に)を把握することが出来る」(『朝鮮近代史料研究集成』第3号、昭和35年)との趣旨のもと、研究会を重ね、朝鮮統治関係重要文献の翻刻を試み、小早川九郎編著『朝鮮農業発達史』(原著、

朝鮮農会、昭和19年)などを再刊している。(3)第一次資料を通しての大阪汎愛扶植会の運営の実態は、岡山孤児院の場合のようにその日誌の所在を突き止めることが出来ないために、残念ながら解明できないままに終わっている。日本国内で発行されていた当時の新聞雑誌を丹念に渉猟する必要性を痛感しているが、<http://www.koreanhistory.or.kr/>にて扶植農園とハングルで入力して検索すると、昭和10年2月28日付の朝鮮民報の記事「社会事業家として疑れる加島氏/東村扶植農園の改革案/今や地元の輿論と化す」との見出しでの400字ほどの記事を筆頭にして17篇の日本語表記、ハングル表記の新聞記事のPDFファイルを読むことが出来る。いずれも加島自身が作成したスクラップブックには収録されていない記事であり、加島にとっては昭和10年の出来事としての扶植農園理事長職からの離脱は本意ではなく、新聞報道は不愉快の極みだったであろう。

以上項目ごとの研究成果を列記してきたが、本研究は近代日本における児童保護の過程のなかで、その当事者たちが抱いた保護への意図(慈恵的保護)が政治社会情勢のなかで一方は朝鮮への移民事業を持続するなかで、他方はその事業を断念するなかで、しかしそれぞれセツルメント運動(社会的援助)の側面を帯びるに至ったことを示すものである。ただし、両者ともセツルメント運動がなされたことを指摘する際にも、移民事業のなかにもいろいろ要素が絡まり、持続は持続一辺倒だったと、単純に解釈することには慎重であった方が賢明と思われる。今後の日韓の歴史認識の共有化に向けて、この慈恵的保護と社会的援助の問題は大切な論点になるだろうと確信する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

長沼友兄、植民地朝鮮に展開した社会事業と渋沢栄一、渋沢研究、第21号、pp.23-43、2009年1月、査読有。

小野修三、石井十次の移民事業、慶應義塾大学日吉紀要社会科学、第18号、pp.1-71、2008年3月、査読無。

小野修三、明治・大正期における岡山孤児院と大阪汎愛扶植会、慶應義塾大学商学部創立五十周年記念日吉論文集、pp.587-601、2007年9月、査読無。

[学会発表](計2件)

小野修三、岡山孤児院(石井十次)と大阪汎愛扶植会(加島敏郎)の移民事業、Hiyoshi

Research Portfolio 2008、2008年11月15日、
慶應義塾大学日吉。
安東邦昭、石井十次と朝鮮半島、第53回
日本基督教学会九州支部会、2008年3月
28日、福岡女学院。

〔その他〕

ホ - ムページ

<http://www.fbc.keio.ac.jp/^onoshu/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野 修三 (ONO SHUZO)

慶應義塾大学・商学部・教授

研究者番号：90103902

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

永岡 正己 (NAGAOKA MASAMI)

日本福祉大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：20121486

小笠原 慶彰 (OGASAWARA YOSHIAKI)

京都光華女子大学・人間科学部・教授

研究者番号：00204058

坂井 達朗 (SAKAI TATSURO)

帝京大学・文学部・教授

研究者番号：70064730

米山 光儀 (YONEYAMA MITSUNORI)

慶應義塾大学・教職課程センター・教授

研究者番号：40167044

松田 隆行 (MATSUDA TAKAYUKI)

花園大学・文学部・准教授

研究者番号：60351293

(4) 研究協力者

長沼 友兄 (NAGANUMA TOMOE)

東京都萩山実務学校・元校長

安形 静男 (ANGATA SHIZUO)

宮崎産業経営大学・法学部・前教授

安東 邦昭 (ANDO KUNIAKI)

蔚山大学校・日本語学科・前教授